

幼児期に経験すべき基本的な 動きの習得を意識した遊びの実践

学校名 南アルプス市内全保育所（山梨県）
全校幼児数 2,188名（男児1,159名 女児1,029名）
（本事例に係る問合せ先）
電話番号 055（282）7293
メールアドレス m.akiyama@city.minami-alps.lg.jp

1 研究のねらい

子供が楽しみながら体を動かし、多様な動きの経験が可能となるおもしろい遊びの実践を通して、基本的な動きの習得及び洗練化を図る。

2 研究の概要

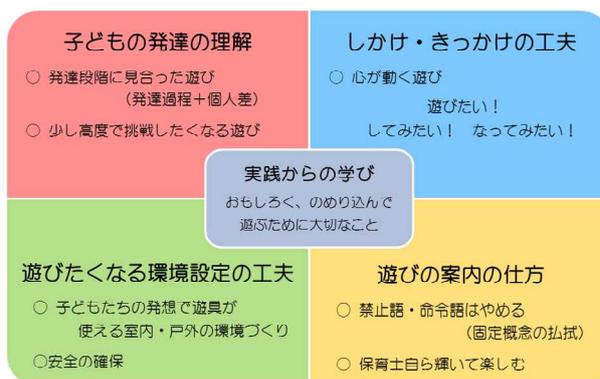
- 保育士が動きに着目した遊びを実践し、子供が楽しめ、遊びが盛り上がる要素を考察する。
- 基本的な動きの習得状況に関する動作撮影を年2回実施し、動きの変容を検証する。

○実践プログラムの紹介

✓ 多様な動きを経験できる遊びの工夫

〔子どもが楽しみながら体を動かし、多様な動きの経験が可能となるおもしろい遊びの実践〕

- ① 保育士全員が幼児期に経験すべき基本的な動き（36の動き）に着目した遊びを実践し記録する。
- ② 幼児の年齢別に楽しそうな遊びのしかけやきっかけを考え、遊びが盛り上がる要素を考察する。
- ③ 幼児期運動指針から運動発達の過程を学び、年齢発達段階別に応じたおすすめの実践プログラムを作成する。



〔5～6歳の幼児が楽しめる遊び〕

ボール運び競争（走る・はう・運ぶ・つかむなどの動きを経験）

5～6歳は「基本的な動きを組み合わせる巧みな全身運動を楽しむことのできる時期」である。写真は2チームに分かれ、部屋の中心に置いてあるボールを自分の陣地まで持ってかえり、より多くのボールを獲得できたほうが勝ちというルールで遊びを展開している様子。



○幼児の安全を確保するため配慮（工夫）したこと

- 1 保育士による毎日の遊具点検に加え、専門業者による年2回の遊具点検及び修理を実施した。
- 2 毎日の生活の中で“ヒヤリハット”に気付いた時は、正確な情報を迅速に報告し、原因・問題点を分析、職員への周知・改善を図った。

○成果の意義と今後の課題

- 1 動きに着目したおもしろい遊びの実践を通して、多様な動きの習得及び洗練化がみられた。
- 2 子どもが楽しめる遊びのしかけ・きっかけの考察を通して、保育士自身の資質向上がみられた。
- 3 家庭との連携を踏まえた降所後や休日における遊びの充実を図ることが今後の課題である。

○ 研究内容

〔1歳3ヵ月～2歳未満の幼児が楽しめる遊び〕
新聞紙遊び（つかむ・引くなどの動きを経験）



〔3歳～5歳の幼児が楽しめる遊び〕

チャレンジランド（渡る・くぐるなどの動きを経験）



〔戸外遊び環境の工夫〕

遊具を自由に組み合わせて遊ぶために遊具庫を開放



〔室内遊び環境の工夫〕

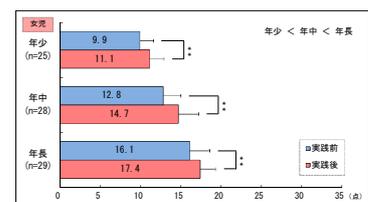
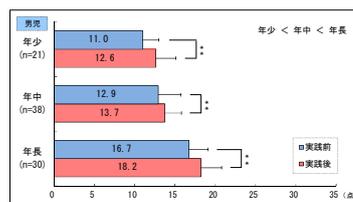
室内においても身体活動量の確保が可能となる環境の工夫



〔基本的な動きの習得状況に関する測定結果〕

7種類の基本的な動きの習得状況に関する動作撮影を年2回実施し、動きの洗練化についての検証を行った。

基本的な動きとして「走る」「跳ぶ」「投げる」「捕る」「まりつき」「前転」「平均台移動」の7種類を設定し、それぞれの動きの習得状況を未熟な段階（パターン1）～成熟した段階（パターン5）の動作様式に分類を行った。



7動作すべての合計得点（動作発達得点）を性×学年別に算出し、実践プログラムの実践前と実践後による比較を行ったところ、男児・女児ともにすべての学年において実践後の動作発達得点が実践前に対して統計的に有意に高い値を示していた。

〔日常的に運動に親しみ、運動を継続して実践する子どもを育む〕

体を動かすことを心地よく感じられるような遊びを継続的に実践していく。

- 1 保育士がプレイリーダーとなり、子どもが「おもしろく」「のめり込む」遊びを提供していく。
- 2 保育所内での遊びの充実を保護者に向けて積極的に発信していき、家庭との連携を図っていく。
- 3 小学校との連携・交流を図り、「保育所・学校・家庭・地域」が一体となった取組を推進していく。